

きょうと福祉倶楽部だより

8月号

平和と介護を考える 一敗戦80回目に想うこと

今でこそ介護というと加齢による心身機能の低下をされた方がうけるものという認識です。

しかしあの忌まわしい世界大戦の時代はどうだったでしょう？

わたしたちの国、日本は80年前の8月広島、長崎で原子爆弾の被害に遭い多くの同胞を亡くしただけでなく、放射線や爆風、高熱にさらされた人が障がいをおって生き延び苦しみながら生きるという時代もありました。また今なお戦争被害で苦しむ人々もいます。

現代で介護を必要とされる方々は戦争被害で人によって与えられた苦難ではなく、「年をとった」ことでおきたものだとするならば仕方がないことなのかもしれません。

しかし、戦争の絶えない地球です。

日本の国会議員の方も「核武装」を唱える方も出てきました。

天寿を全うだけではなく、再び戦争の災禍によってあらたな介護が必要な人が生まれる社会にはしたくありませんね。

後世には平和な日本を受け継ぎたいものです。

残酷な戦争の爪痕をひとつご紹介したいと思います。

わたしが病院勤めだったときに出会った、下村盛長さんはわずか41歳で世を去ったのです。

彼が病院を訪れるときは決まっていた。それは右腕の付け根にできた大きな「こぶ」が更に拡大して痛みに耐えかねたときでした。

病院での彼の評判は面倒な患者さん。入院させて治療をしても痛くなくなったらどこかにかってに行ってしまう。看護師にもわがまま言い放題ですから当たり前の評価です。

そんな彼の大きな「こぶ」。彼は被爆者健康手帳の所持者でした。

お母さんのお腹の中で彼は被爆、そして世に出てきたのです。

でも、わたしのところに来たときはその手帳も紛失、家もないホームレスでした。

そこで手帳の回復や医療費、生活費を確保するために生活保護の申請などにわたしは奔走しました。

そこで、ふと思ったのです。この大きな「こぶ」は原爆に関係するのではと？

あれやこれや調べた結果、これは放射能に起因すると確信し、当時の厚生省にそれを認めさせるために申請を出したのです。その手続きは事例も少ないため他者の手も借りました。被爆者の団体である、日本被団協の相談員とやりとりを繰り返して実務を進めました。そうしているとき、被団協から「下村さん、原爆小頭症ではないの？」と。

病院のスタッフはわたしも含めまったくそんな障がいを知りませんでした。慌てて調べてみると間違いなく下村さんは小頭症です。そこで更に小頭症の認定障害である「近距離早期体内被爆症候群」の申請も始めました。

そのころ、下村さんはこれまでと違い腕にできたこぶは局所切除では対応できなくなり、右腕をバツサリ切り落とさなければならなくなったのです。下村さんは右腕を無くしたのに「これでせいせいした」と。

もうこれで痛くないと思ったのでしょうか。でも彼の安堵もつかの間のものでした。今度は「こぶ」が頭に出てきたのです。そしてその切除を目的に再び入院です。でも彼はもう家には帰れず人生を閉じたのです。

亡くなった後、医師は彼の身体から腫瘤を取り出しました。40キロに満たない身体に10キロを超える腫瘤があったのです。

わずかな入院と入院の合間に借りることができたアパートの小さな部屋には厚生大臣が彼の小頭症を認めた認定書が飾られていました。

有限会社 おとくに福祉研究所

きょうと福祉倶楽部

〒617-0824

長岡京市天神4丁目7-12 ハイツ東台101号

TEL 075-958-2560

FAX 075-957-2808

E-mail info@fukushi-club.com

きょうと福祉倶楽部ホームページ

